夢を走る

日野啓三

夢を走る

日野啓三

中央公論社

日野啓三（ひの　けいぞう）
1929年，東京生れ．東京大学文学部社会学科卒業．
74年，平林たい子賞，75年，芥川賞，82年，泉鏡花賞を受賞．主著に，評論選集「名づけられぬものの岸辺にて」，長篇「抱擁」「聖家族」，短篇集「あの夕陽」「天窓のあるガレージ」等．

夢を走る　　定価 1200 円
昭和59年11月15日初版印刷　昭和59年11月25日初版発行　検印廃止　©1984
著者　日野啓三　　発行者　嶋中鵬二　　印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替・東京2-34
ISBN4-12-001354-5

夢を走る

装幀　薗部雄作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

カラスの見える場所　5
星の流れが聞こえるとき　30
ふしぎな球　55
砂の街　87
孤独なネコは黒い雪の夢をみる　124
石の花　161
夢を走る　183

カラスの見える場所

「地下鉄五分、国電八分、交通至便」も「有名小中学校近し」も「東南角、日当たり良」も、どうでもよかった。若者には毎日通勤する勤め口も子供もなかったし、日の当たる場所も自分にはもう無縁になった、と思っていたからである。

若者が目をひかれたのは、「閑静至極」というたい文句だった。それはいまや彼にとって最も無意味なことだったから、広告のパンフレットを手にして思わずニヤリと笑い、そのマンションの一室を借りることにした。

若者はひとりで越してきた。運送屋の小型トラックの助手席に乗って。

マンションの管理人は「手伝いましょうか」と声をかけたが、若者は軽く手を振っただけで、

運送屋とふたりで手早く荷物を運び入れた。荷物はベッドと小型冷蔵庫のほか、布団袋と段ボール箱が五、六個だけだった。テーブルも椅子もテレビも箪笥もなかった。他に若者が膝に乗せてきた小型の楽器のケースのようなものがあった。

若者はジーンズの上下がよく似合うすらっとした体つきで、パーマをかけた髪が滑らかに波打ち、顎と口のまわりにのばしたひげも、いや味なく自然だった。細い金縁のサングラスのため目つきはわからなかったが、感じのいい若者だと管理人は思った。

若者の方は、女の管理人というのは初めてだったので、少し驚いた。骨太で頑丈そうな、もう中年過ぎの女だった。

荷物を運び終わったころを見計らって、女管理人は二階の若者の部屋に行き、湯沸器の使い方、ドアと窓のロックの仕方を教えた。若者は相手の顔を見つめて熱心に聞いているように見えた。質問することも、関係のないことをしゃべることもなかった。

少し無愛想だが、口数の少ない物静かな男なのだろうと、女管理人は改めて思った。

「わからないこと、困ったことがあったら遠慮なく尋ねて下さいな」と言って女管理人は部屋を出た。

若者は丁寧に頭を下げた。

ひとりになると、若者は部屋の真中に無造作に置かれたベッドの、剝き出しのマットレスの端に腰をおろした。

ガラス戸越しに道ひとつ隔てて、かなりいたみかけた高く長いコンクリートの塀と、その向こうに木々の茂みが連なっているのが見えた。部屋が二階なので、塀の内側の全体を見渡すことはできないが、かなり広大な敷地にびっしりと木が茂っているようだった。

国電環状線の内側の旧市街に属するこのあたりに、そんな大きな公園のようなものがあっただろうか、と若者は考えてみたが、思いつかない。曇り日の午後の鈍い光の中で、茂り放題に茂った木々の葉並は、ねっとりと青くさいような静寂を抱えこんでいる。動くものの気配はない。塀沿いの道にも、車も人も通っていなかった。

これなら本当に「閑静至極」のはずだ、と若者は思わず笑い出したくなる。彼がこの大都市に出てきて最初に住んだ木造アパートは、郊外電車の線路わきだった。電車が通る度に窓ガラスまで震えた。パチンコ屋の隣のアパートにもいたことがある。一日じゅう玉の出る音が続いたあと、閉店後に店じゅうの玉を磨くためにものすごい音がひびいてくる。隣で一日中テレビをかけ放しの部屋にもいた。

音という防ぎようのない外からの侵入者に、彼はずっと腹を立て続けてきた。静かなところに住みたいと思い続けた。そのために無理して働き、金も溜めてきた。そしてようやく静かな部屋

に住めるようになったいま、それは最も必要のないものになっていた。

二年前の原因不明の高熱病のあと、若者は少しずつ聴力が弱まり、一か月前に完全に聞こえなくなったのである。

バンドの仲間たちは、抗生物質を射ちすぎた医者の医療ミスだから訴えて金を取れと、しきりにすすめたが、若者はそうしなかった。裁判などする気力さえなかった。呆然と目だけを開いて、一日毎に音が薄れてゆく世界を彼は見つめ続けた。一切の物音が遠ざかるにつれて、逆にいろんな物が剝き出しになって近づいてくるようだった。

理屈では、楽譜通りに演奏すれば自分の耳では聞こえなくても、客には聞かせられるはずだが、事実、この間まで懸命にそうしようとしてきたのだが、バンドの仲間のギターもドラムもヴォーカルも聞こえなくて、どうして一緒に曲に乗ることができるだろう。親切な仲間たちは、それでも彼を守りたてようとしてくれたが、若者はきのう、最終的にバンドを抜けた。そしてこの新しい部屋を、誰にも教えていない。

音楽では沈黙もまたひとつの音だ、と若者は知っていたつもりだった。彼のテナーサックスは、吹く音よりも休止の間の取り方の微妙さで評判になってきたのだった。だが音という音が消えていったあとに剝き出しになってくる静寂は、そんななま易しいものではなかった。

砂漠の真中で一粒ずつ砂に埋められてゆくようなものだ。音のない一秒一秒が乾ききった砂粒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のように、若者の心を埋め続けた。さらさらと、絶え間なく……。

そして砂漠の中の蜃気楼のように、記憶の中の音が、思いがけないときに意識の裏で鳴ったり流れたり途切れたり消えたりする。体で捉え味わうことのできないそんな記憶の音は、かえって心を狂わせる。

目が見えなくなるよりは、あるいは寝ても覚めても耳の中でゴロゴロと音が鳴り続けるという病気よりは、この方がまだいい、と自分を慰めることはあるが、この巨大な空白の圧迫感にどれだけ耐えられるか、本当のところ若者は自信がない。

できることは忘れることだけだ、ほんの僅かの間でも。

彼はベッドから立ち上がると、段ボール箱を開く。僅かばかりの食器、衣類、雑誌、小道具類を、わざと時間をかけて、並べ直し置き直し、たたみ直したりする。テナーサックスのケースを、ベッドの下に押しこんだり、また引き出して壁に立てかけたりした。

幸いスーパーマーケットが、少し歩いて行けるところにあった。かごを手にして棚の列の間を歩き、いまとくに必要でもない物、以前は全く興味がなかった物も丹念に眺める。手に取ってさわる。幾種類も出ている歯みがきとか、きれいなスパイスの小びんとか、そうめんと冷麦の太さのちがいとか。

買った物は黙ってカウンター台に、かごごと置けばよい。金額はカウンターに表示される。口をきく必要はない。

煙草も自動販売機で買える。洗濯もコインランドリーで黙って坐っていればいい。自分が他人と口をきけなくなってみると、いまの時代は結構口をきかなくても生きられるようになってきていることに気付く。

スーパーのあと、国電の駅前まで行って、ゲームセンターで二時間近くをすごす。異星人との戦闘ゲームをしながら、空気のない宇宙空間の戦闘では、本来どんな発射音も爆発音もありはしないのだと、若者は思ったりした。

金はもうしばらく遊んでいてもいいぐらいはある。

耳が聞こえなくてもできる仕事を考えてみる。読唇と手話の訓練を受ければ何かありそうにも思えるが、その訓練を始める気にならない。金がなくなったとき考えればいいし、もしそのときでもその気にならなければ、ひっそりと死ねばいいのだ、と深夜、若者はケースをあけテナーサックスを取り出して眺めながら考えた。

世界が様々な物音と言葉にみちていたとき、死はとてつもなく遠く、考えることもできないような別世界だったが、いま静けさを通して、すっと移ってゆけるような気もする。

そんなことを考えながら、自然に楽器を口にあて指が動いている。慣れきった楽器は確かに、

若者の一番好きな曲を奏でているはずなのに、耳には何も聞こえていない。まわりじゅうを埋めつくした見えない砂粒の群が、一秒に一ミリずつずれてゆく気配だけ。

話がしたい、と強くこみあげるように思う。

いや、誰にも会いたくない。

大都市のマンションはいいと若者は思う。隣室の住人とも口をきかなくていいし、エレベーターに誰と乗り合わせても黙ったままでいい。このマンションの誰も、おれの耳が聞こえないということを知らない。

女管理人だけが玄関を通る度に、若者に声をかける。「お買物？」とか「天気がいいわねえ」といった程度のことらしいが、若者はいつも軽く頭を下げて通り過ぎる。時には微笑を浮かべてみせることもある。

女管理人は親切だがしつこくはない。どうして毎日ぶらぶらしているだけなのか、というようなことは決して口にしないだろう。

若者の部屋はワンルームである。寝室も食堂も居間もない。三十平方メートルほどのがらんとした床のひろがり。家具はベッドだけ。

ベッドはかなり上等である。それはちょうど若者の耳が聞こえなくなり始めたころ、一緒に住

んでいた女の子が運びこんできて、置いて出ていったものである。
女の子は、話しかけても振り向かない男に腹を立て続けた。「ひとを何だと思ってるのよ、返事もしないで」と大声でわめく声だけはかすかに聞こえた。
女の子は勝手に若者のところに転がりこんできた田舎町のナイトクラブの女だった。そのクラブで、若者たちのバンドが一か月出演していたのである。
若者はその女の子が好きでもなかったが嫌いでもなかったので、そのまま一部屋に暮していたのだが、彼の態度が急に冷たくなったと女の子が毎日ぐちを言い始めると、口の動きで何か言ってるらしいとわかりながら、言っていることが日毎に聞こえなくなるのを、若者はありがたいとさえ思うことがあった。
「あんたって本当に冷たい男ね。女にべたべたしないところが、すっきりして素敵だと思ったんだけど……」
そんな女のわめき声を膜をとおすように聞きながら、若者はふと思ったことがあった。耳が聞こえなくなってひとと口をきかなくなったのではなくて、ひとと口をきかなくてすむように、耳が聞こえなくなったのではあるまいか、と。
女にはとうとう耳のことは打ち明けなかった。
女が置いていったベッドに横になって天井を見つめながら、女のことは（とくに体の接触の感

覚は）ほとんど思いだせないのに、いつだったか心に浮かんだあの妙な考えは何度も甦る。

もしかすると、おれはひそかにこの状態を願っていたのではないか。

事実、若者は耳がまともだった時より、いまの方が格別に不幸でもないような気もする。ろくに勉強もしないで、中学生のときからサックスばかり吹いて、高校も卒業しないで旅まわりのバンドに加わったりして、いったい自分が何をしているのかもわからないような毎日だった。そのわからない自分自身の手ざわりのようなものが、ぼんやりと感じられてくる。何となくひんやりして、ざらざらして、時折ひくひくと震える……。

旅まわりの間に仲間から何度かマリファナを吸わされたことがある。だが若者はいつも吐気だけしてトリップしなかった。「おまえって、ダメなやつだな。へんな芯のようなものがありやがって」そう言われたことがある。その「芯のようなもの」の手ざわりがこれなのだろうか。

次第に夜中も、壁にもたれて剝き出しの床に坐りこんでいることが多くなった。

新聞も読まないし、テレビもラジオもカレンダーもないから、きょうが何月の何日かわからない。

ガラス戸の向こうで、森の木々の色がどれも同じようになってきた。引越してきたころは、同じ緑でも淡いのと濃いの、黒ずんでいるのと黄色っぽいのと、ずいぶんちがいがあったのに。

夏が近づいているにちがいない。金は秋までもたないだろう。

珍しく森が明るく輝いていた。いつもむっと押し黙っているような木々の葉が、いっせいにおしゃべりを交しているように見える。いったいあそこはどのくらい広いのか見てやろうという気になって、若者は初めて屋上にのぼった。

エレベーターは十二階までで、それから階段を登って鉄の重い扉を押すと、屋上だった。まわりに金網を張った柵がある。端の方にさらに一階分高くなってその上に、給水タンクが据えられている。

柵のそばまで行って眺め渡して、若者はこのマンションがあたり一帯で一番高いことに驚いた。下を歩きながら細長いマンションとは思っていたが、こんなに高かったとは。

ひとつは地形のせいもあった。このあたりで地面が一番高くなっていて、森の広がりがなだらかに低まりながら連なっている。想像したより広い森だった。建物らしいものは見えないし、運動場や芝生もない。とすると公園ではなさそうだが、では植物園だろうか。

何にせよ、そこだけが緑で、あとは見える限り灰色っぽいビル、黒ずんだ屋根の連なりである。空はほとんど雲もなく晴れているのに、地上の眺望はぐるりと煙っていて、まるで静まり返った別の世界に取り囲まれている感じだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com